

B 日程 小論文試験

問題 1 (配点 60 点)

次の文章（中井正一「美学入門」『中井正一評論集』岩波文庫）を読んで、後の各設問に答えなさい。

さきに、空間が生きもののように、いろいろの形をもって歪んだり、ゆがんだりして、それぞれの民族の心を表わしていることを考えてみたが、それは空間ばかりが生きて、いろいろに歪んでいるのではなくて、時間もそうなのである。

マルクスという音楽批評家が、リズムには、ドイツ語でいう「hin」と「aus」との二つのリズム、すなわちそこが、到着点としてのリズムと、そこが出発点となるリズムと二つのものがあるというのである。つまりポンとうつ太鼓だって、そのリズムの調子が、そこまでで止まってしまい、それを受けとめるために、ポーンとうつリズムと、同じポーンでも、そのリズムから始まって出発するために、ポーンとうつリズムとがあるというのである。生命の調子が、やっとそこまでたどりついた、じっと、これまでの時間をふりかえるころの調子のものと、おさえられたものをふりきってでも、立ちあがり、うめきたち「さあ出発だ」と遠い憧れに燃えつついる魂の調子のものがあるわけである。

前章でのべたギリシャ人のところがまえは、この考えかたでは、一瞬一瞬が、重いものをささえきって耐えてきたころもちを表わしている。それに反して、ヘブライ人のころもちも、どの一瞬もが遠い憧れに向って、はやりたち、燃えあがらんとしているともいえる。

「今」と簡単にいっているこの「今」が、ころの調子次第で、後に向って待ちうけるような「今」と、前のほうに向って出発点となるような「今」と、二つの感じをもっているのである。ちょうど陸上競走でリレーをする時、バトンを渡す人のころもち、つまり、たどりきたった苦しみを、最後までもちこたえているころもちの人と、そのバトンを受けとって、今まさにレースコースにつっ走ろうとする人のころもちでは、同じ白いラインもゴールとしてのラインと、スタートとしてのラインと、二つの意味をもっている。人のころの姿勢で、同じ一瞬間、すなわちこの「今」でも、二つの調子、リズムとなるわけである。民族の精神の調子が違ってしまうと、その取り扱いかたが違ってくる。

同じ地平線も、重さを耐えて、耐えきった涯の最後の線、ゴールラインとして、ギリシャ人は考えているし、ヘブライ人は、出発の水平、スタートラインとして取り扱っているわけである。立っている自分がもどかしく、建築と共に、あの天の中にのぼりたいと、憧れの魂の調子の中にいるのである。概して、歴史が、進歩するものだと考えている考えかたは後者の魂の調子の太鼓をうっている

こころのリズムをもつものである。

こう考えてくると「今」という時間と、眼前にひろがっている地平線の空間が、いわば一つに融けあっていることになってくる。生きているということ、この地上に立っているということが、この世界のいろいろのものを勝手に感じとり、勝手に解釈して、力みかえっている、このことが、実にみごとな証拠だといえる(1)。別にそれをそう考えない民族は、すっかり違ってそれを取り扱うことともなるのである。

日本人は、これをどう取り扱っているだろう。茶室の柱など、重さをささえているとか、空を貫くという考えかたをつとめて避けて、軽く、きわめて軽く、この空間に浮いているようなこころもちを現わしているようである。しかしその軽さは、きわめて、緊張したものである。前にも、後にも、動かしようもない、そのほかにはありえようもない、宇宙間の秩序の中に、その処を、しっかりと把握しようとしているようなこころもちなのである。

日本語の、芸術家のよく用いるあの「間」(2)は、「間あい」「間があう」

「間がぬける」「間にはまる」「間がのびる、ちぢむ。」というあの間は、時間にも用い、空間にも使うのであるが、これなどは、まったく日本的なものなので、英語に訳しにくい言葉である。テンポでもなく、スペースでもない。

お能で、あの太鼓がポーンと切り込むが、あれなどは、それまでの一切の時間を、切って捨てたような感じのものであって、決して、オーケストラのリズムのように、次から次に続くものの、その一つをうっているような太鼓ではない。前にも、後にもない、鋼鉄のようにしまりきった時間を、ポーンと、凝集しきった形できめつけるような太鼓なのである。頭の中のを裂かれるような快さである。モヤモヤした何ものもが、脱落しきった感じなのである。

これが、日本の「間」という日本の芸術の時間なのである。時間が、糸のように連続して流れていると思っていたのに、むしろ、切断されてしまって、ほんとうの自分が流れ動き、新しいものになっているのを感じるのである。

前の時間が、そのまま流れているのは、滞っているのである。切って捨てて脱落して新しく生まれるからこそ生きているのである。

「間」というのは、この生きていることを確かめる時間の区切り、切断、響きなのである。

すべての音楽、舞、演劇、美術のすべてに、この緊まった、軽い「間」なるものが、あるわけである。そして、この「間」がわかるのは、ただ、訓練だけであると、東洋の芸術、および日本の芸術は教えているのである。

なぜなら、この「間」は、ただ覚えたり、意識してやったのでは、常に「間のび」するものなのである。ほんとうに「間にはまる」には、ただ訓練、一にも二にも練習がいるというのである。これは外国でも同じはずである。またスポーツでも同じである。

この練習というのは、頭で考えたよりも、もっと自然なもの、もっと大きなものが、肉体の中から出てくるのを合理的に訓練するのである。力みから脱出する。ちょっとほめると、それを力みまねる。ボートでいえば、水を漕ぐのを忘れて、コーチの前に、ポーズでミーティングをやっている。これを叱りつけて、ただひたすらに水に身をゆだねまかすことでオールのコツを覚えるのであ

る。ここで初めて、訓練の中で大いなるもの、自然なるものにまかすことが、ほんとうの合理的なものに到達することがわかってくる。

浄土教で「他力」といい、如来にまかすというが、ちょっとやそつとでの訓練でここには、いたれないのである。

誰がどういった、こういったと理屈こねるよりも、この困難な訓練の中に飛び込んでみると、それらのもののいったことの中の、一番ほんとうのことが「ハハア、これか」と初めてわかってくるのである。行動と実践が大切だというのはこのことである。この実践の中で、もう耐えきれないと思われるような訓練の涯で、コーチャーから「それだ、その調子」といわれた時、その行動の中にみなが^{はて}ってくる、ほかにありえようもない一つの秩序、一つの安らけさ、ここに「間があう」という「いきがあう」という、何か身をまかせた愉快的、やわらいだ、ころよさ、その美感が、ほのぼのと生まれてくるのである。

この訓練と行動を尊ぶところは、実は、大きな現実への信頼があって初めてできることである。現実の中に「論理的なもの」「正しいもの」が必ずひそんでいることを、信頼しきっている証拠なのである。

これは大変なことなのである。自分の肉体を信じ、この世界を信じ、歴史を信じ、人類全体を信ずることなのである。

(中略)

人は、それぞれの生きかたによって、すべてのものを勝手気儘に形づくっているのであるが、それは音の世界では、リズム、メロディー、ハーモニーとして現わされ、光の世界では絵画彫刻または、建築の柱や屋根に、生命の調子がいろいろの形式で現わされているのである。

だから芸術は、時間だろうが、空間だろうが、光だろうが、音、言葉など、何でも媒介として、人々の感覚にうったえるもの全部を、生きているいろいろの調子で、どんなにでも変えてくるのである。しかし、これらのものを、自由に変える奔放自在な欲望が生まれ、またそれらのものを変える権利をもったものは、それを生みだすものが、つまり自分が、「今」と「ここ」にほんとうに生き、「あつ」と叫び声をあげるような生命にめぐりあった時だけなのである。それがどんなに悲しい時であれ、それがどんなに怒りに満ちたものであれ、ひしひしと「生きている」「生きている」と、自分が自分の生命に驚きの声をあげる時のみ、人々は、時間に、空間に、光に、音に、言葉に「これをこんなに自由に、使いまくれるんだ」「命令しうるんだ」といえるのである。ある時は、自分の生命に向って、この生命を亡くしてもいいのだ、「この命よ、これで亡んでくれ」と、自分にいきかすことができる時こそ、人間は、光に向って「かく光よあれ」、言葉に向って、「かく言葉よあれ」と、命令できるのである。

そんなたかぶった命、高揚した自分を、いつつかめるだろう。

昔の本の『耕雲口伝』にしていることであるが、「唯、寝食を忘れ、万事を忘却して朝夕の風に耳をすまし、何時も胸中に、大疑団、大いなる疑のある如くに暮し明かせば」いつか、かかる自分にめぐりあうと知っているが、この生きていることに大いなる不安、大いなる憤り、大いなる疑いと畏れを持ちつづける、まじめな態度が、このめぐりあうことの前提となるのである。むしろ、ほんとうに、眼を見開き「何ものかが宇宙にあるにちがいない、何ものかが人生にあるにちがいない」と、問い求めていく、容易ならざる命の一瞬一瞬を手離さない時、私たちはいつの日にか、この自分自身に、この動きゆく自分に追いつきそして追

い抜き、自分自身にめぐりあう時がある。

フランスの平和のために闘った闘士であり、またロマン・ローランの友だちであり、しかもその真剣な闘いのために暗殺されて命を終ったジャン・ジョレースは、次のようにいっている。

「時々私たちは、大地を踏んでいると、その大地を踏んでいることが、大地そのもののように静かな深い喜びを感じることがある。私はよく小道をよぎったり、野原をよぎって歩んでいると、自分が踏んでいるのが大いなる大地である、ということ、しかも私がその大地そのものであり、大地であるということ、愕然と気づく時があった。そして思わずしらず私は歩みをゆるめた。大地のこの大いなる表面を歩むのに、別にコセコセするにはおよばない。一足ごとに私は大地を感じており、大地をすっかり把握しているのだから。また私の魂は、いわば、最も奥の深いところへと探りすすんでいたのだから。だから私は、私の歩みをゆるめたのである。また私はよく溝の辺に臥して、日が沈んでいく時柔らかな深い深い青色の東方に向って、大地が大いなる旅をしつつあること、また一日の疲れと、日の沈んでしまった地平線の彼方に、彼女はめざましい飛躍をもって、静かな夜と、無限の地平に向って飛び去っていること、そして、大地が私をも、その地平線の彼方へ連れていってくれることを思ったのでした。私は、私の問いの中に、私の魂の中と同じように大地そのもののわななき、進んでいく大地の飛び去りゆくわななきを感じた。そして私は、私たちのまえにただ一つの皺^{しわ}も、ただ一つの襞^{ひだ}も、ただ一つのささやきもなしに開いている、寂かな寂かなこの青空に、不思議な和やかさを見いだした。おお、私たちの肉体と大地との、この友情は、私たちのまなざしや、星の輝く大空の中にさまよう、漠然とした友情よりもいかにばかり深く、いかにばかり強烈なものであろう。もし私たちがこの大地に結ばれていることを、こんなに深く感じなかったら、この星の散らばっている夜の美しさは、こんなにみごとな美しさとはならなかったであろう。」

こんな言葉を読んでいると、彼が一瞬一瞬、実に生き生きと、ほんとうに生きているのだと思わずにいられない。こんな生きかたにくらべたら、私たちの一日一日は、あたかも、一日一日、いたずらに酔生夢死しているようであるともいえる。ジョレースはこんな立派な生きかたをしたから、だからこそ、暗殺されることを何とも思わずに、平和のために政治家として闘えたのだと思わずにいられない。そして、その信念のためなら、「自分に死ね」と命令することがみずからにできたのである。ほんとうに生きるには「これで自分に死ね」といえなくてはほんものではない。こんなすばらしい生きかた、また世の中を見る目を考える時、ぐずぐずと人の悪口をいったり、それに腹を立てたりして生きている自分たちの日常の生活、そして人生を見る目は、何だか死んだ魚のうるんだようなまなざしでしか、私たちは世の中を見ることができないのかと思えてくるのである。自分自身をすら、うす汚れた、うるんだ眼で見ているのである。ジョレースが見ている目のように、「今」と「ここ」に生きていることを生き生きと自分にいきかせうる自由な魂が、自分の中に姿を現わす時、初めて私たちは自然を見、人生を見、自分を見ることができるのである。そしてその時初めて、自分自身にめぐりあったともいえるのである。

かかる生きた眼によって見る光が、初めて明かるい光、暗い光、燃える紅、しみ入る大空の自由の青さを見ることができるのである、その生きている喜びを、光に託して、音に託して表現し、またせずにはいられなくて表現するものとなる

のである。

それを見るものは、その光を通して、その音を通して、その生きたいのちのいぶきにふれて、自分もが自分の生命にめぐりあうきっかけを得るのである。それが芸術というか、美の世界なのである(3)。

【設問1】（配点：20点）

下線(1)に「このことが、実にみごとな証拠だといえる」とあるが、筆者は何が、どのようなことの証拠だと言っているのか。筆者の言葉を用いて、300字以上400字以内で説明しなさい。なお、その際、「ヘブライ人」及び「ギリシャ人」という用語を用いること。

【設問2】（配点：20点）

下線(2)に「あの間」とあるが、筆者は日本語の「間」とは、どういう意味であると説明しているか。筆者の言葉を用いて、200字以上300字以内で説明しなさい。

【設問3】（配点：20点）

下線(3)に「美の世界」とあるが、筆者のいう「美の世界」とはどのようなものと考えられるか。筆者の言葉を用いて、300字以上400字以内で説明しなさい。なお、その際、「芸術」及び「自分」という用語を用いること。

以上

B 日程 小論文試験

問題 2 (配点 40 点)

次の文章（安克昌『心の傷を癒やすということ』角川ソフィア文庫）を読んで、後の各設問に答えなさい。

心的外傷を受けた人は孤立しやすい。それは、心の傷がその人に意識的・無意識的に大きな葛藤を生み出すからである。他人ひとと関係していくのはエネルギーを要することである。葛藤に悩まされている人には、闊達かつたつな対人関係をいとなむ心の余裕がない。

また、心的外傷は、被った人にしかその苦痛がわからない。苦痛さいなに苛まれる人と、心的外傷をもたない人との間には決定的な断絶がある。心の傷をもつ人は「この気持ちは、だれにもわかるはずがない」と考える。もちろんどんな体験であっても、それはその人の固有の体験であり、他者がそれを完全に理解するなどということはありません。だが、とくに外傷体験の場合は、その人自身でさえ、自分の中に受け入れることができないような過酷な体験である。当事者すら理解できない体験を、第三者が外側から「理解」するなどということはさらに困難なことである。

つまり、当事者の心の傷は、第三者にとっては「他人ごとひと」なのである。阪神・淡路大震災で被災した人も、奥尻おくしりや普賢岳などの災害においては第三者だった。当事者は心的外傷の苦痛を味わうだけでなく、「他人ごと」という視線に囲まれて孤立の苦痛を味わうのである。そして、阪神・淡路大震災のような大規模災害においては、当事者である被災者の孤立は、すなわち被災地全体の日本の中での孤立につながるだろう。

では、どうやって当事者と第三者の間の溝を埋めればよいのだろうか。当事者の孤立をどうやって解消すればよいのだろうか。その解答の一つが、ボランティアである(1)。

ボランティアは、当事者か、第三者か、という対立に「当事者を理解しようとする第三者」という新たな次元をもち込んだ。ボランティアの役割は「存在すること」であるという中井久夫氏の至言がある。つまりボランティアとは、居てくれるだけで価値がある。救護する側も、される側も、すべて傷ついた人間しかない被災地では、外部から来た無傷の人間が寄りそうことで、被災者は癒いやされた気持ちになる。傷ついた人にはあらゆる人が遠ざかっていくように見える。そばに居てくれる人、訪れてくれる人はそれだけでとても貴重なのである。被災直後に他府県のナンバープレートの救急車や救援物資の運搬車を見て、胸の熱くなる思いをした被災者は多いと思う。それは“見捨てられていない”という安心感を、感じさせてくれたからである。

「存在すること」による癒しは、かつて精神療法家シュヴィングが『精神病者の魂への道』において印象的に示したことである。彼女は自分の殻に閉じこもる精神病者のそばに、静かに居つづけることで病者の心を開いたのであった。

阪神・淡路大震災では“ボランティア・ブーム”が起こった。第三者の側から当事者に向かって、多くの人たちが歩いてきてくれた。ボランティアがいなかったら、被災地は日本の中で孤立してしまっただろう。ボランティアは被災地の現状を外部に発信し、被災者の代弁をする役割も果たした。ボランティアが被災地を、日本の社会の中につなぎとめてくれたのである。

私が会ったボランティアの多くは同業の精神科医たちであった。被災地には一時期たくさん精神科医がいた。ボランティアとしての交流は、私には新鮮な体験だった。学会や学閥での人脈が“タテの系列”であるとする、このボランティアの交流は“ヨコの系列”である。震災によって日常の領域を越境して、本来出会うことのない人々が出会った。このネットワークは私にとって震災の残した貴重な収穫であった。

心の傷を癒すためには、“ヨコの関係”が非常に重要である。その典型が、第Ⅱ部で紹介した死別者の「自助グループ」であろう。孤立しやすい当事者にとってヨコの連帯はかけがえのないものである。

被災者とボランティアとの間にも、こうした“ヨコの関係”をつくることが理想である。しかし実際には、世話をするものとされるもの、施すものと受けるもの、といった“タテの関係”の落差を埋めることは難しいし、ボランティアが当事者になりきることはできない。それでもボランティアは当事者に歩み寄り、“ヨコの関係”に近づいていく。このことが重要なことであると思う。

当事者への歩み寄りという点では、心理療法の専門家はまさにそのことを重要な仕事の一つにしている。＜治療者一患者＞の関係は、治療するものとされるものという“タテの関係”である。しかし、患者に寄りそい、理解し、声を代弁し、患者が社会から孤立しないようつとめることは、“ヨコの関係”を意識することである。“ヨコの関係”を大切にすることが患者の心的外傷の治療には必要なのである。ボランティアであれ、心理の専門家であれ、当事者に歩み寄ることの大切さは同じである。心的外傷を抱えた当事者にとってその関係が社会との貴重な接点になるからである。

私は学生時代から神戸に住み、もう15年以上になる。しかし、ただ住んでいるだけで、地元のコミュニティ（地域社会）に属しているという実感はなかった。私はいわゆる故郷喪失者の一人であった。

だが、地震が起きてから同じマンションの住人が私の部屋を訪ねてくれた。救援物資をおすそ分けしてくれ、近くで炊き出しがあると妻を誘ってくれた。すぐ近くに住む友人が、そのまた友人の家に風呂を借りに行くとき、私の家族に声を掛けてくれた。

これは阪神・淡路大震災に特有の現象ではない。災害の後、生き残った住民はある種の共同体感情の下で身をよせあう。これを災害心理学では「ハネムーン現象」「ハネムーン期」という。しかし、私にとって、それは文献上の知識ではない。思いがけないやさしさや思いやりを肌で感じ、人間とはすばらしい存在であると私は思った。これは真にかけがえのない思い出として、今も胸の内にある。

阪神・淡路大震災の被災地のほとんどは都会である。住民はお互いに干渉せず暮らしている。一歩外に出れば見知らぬ人ばかりであり、自分が何者であるか知

られることもないし、名のる必要もない。こういう中で、知らない者どうしが助け合う姿は不思議な光景であった。「ハネムーン現象」を経験したおかげで、私のようにあまりコミュニティにかかわってこなかった人をはじめ、被災地に住む多くの人たちが「人と人とのつながり」を強く意識するようになったと思う。被災地にはコミュニティが存在していたこと、自分なんらかのかたちでコミュニティに属していたこと、そして、そのコミュニティが震災によって深く傷つけられたことに気がついたのである。

(中略)

コミュニティとは、地域における人と人との具体的なつながりである。だが、コミュニティは助けあいという美しい面だけをもっているわけではない。一方でコミュニティは、マイノリティの人たちを排除しようとすることがある。村八分や差別という残酷なことも行なうのである。たとえば、震災後の「ハネムーン期」においてすら、排除されようとした人たちがいる。精神障害者・外国人・ホームレスが、避難所で冷遇されたケースがあった。

かつて関東大震災の直後、朝鮮人が混乱に乗じて井戸の中に毒を投入するなどという流言飛語が飛び交い、官憲や一般市民によって多数の朝鮮人が虐殺された。そのため阪神・淡路大震災の後には、韓国のマスコミが「今回は朝鮮人虐殺はなかった」旨の報道を行なった。

阪神・淡路大震災で、外国人は173人の死者を出している。内訳は、韓国・朝鮮111人、中国・台湾44人、アメリカ2人、ペルー1人、ブラジル8人、フィリピン2人、オーストラリア1人、ミャンマー3人、アルジェリア1人（1996年1月12日、兵庫県警発表）などとなっている。被災地にはさまざまな外国人が住んでいたことがわかる。

韓国・朝鮮人および中国・台湾人は、日本に定住する外国人としては歴史が古い。すでに三世代以上の人たちも少なくない。そして、今では日本社会と独特の混じり方をしながら共存している。つまり、特定地域に在日韓国・朝鮮人あるいは在日華僑^{かきょう}が集まって住んでいるわけではなく、閉鎖的な独自のコミュニティをもっているわけでもない。日本語も日本人同様に話し、日本の文化への同化度も高い。文化への同化度が高い分だけ、日本のコミュニティに深く浸透してきていると言えるだろう。

震災のときには、朝鮮人学校が避難所として日本人にも開放されていたし、在日韓国居留民団の炊き出しは日韓の区別なく配られたという。神戸朝日病院の医師・金守良氏は「日本人と韓国・朝鮮人は共に死んだ（共死）だけでなく、共に生き延びた（共生）のである」（「第3回多文化間精神医学会抄録集」より）と述べている。また華僑団体も同文学校（中国人学校）を避難所として開放するなど、「地震後かえって地域住民との心の交流がスムーズになったという感想が各所できかれた」（神戸商船大学の陳来幸氏、同「抄録集」より）という。

このように在日外国人としては歴史の古い韓国・朝鮮、中国・台湾の人々は、自らの民族団体を持ちながら、日本のコミュニティとうまく相互浸透して、震災を乗り切ったのだという。

震災前から、とくに神戸は外国人にとって住みやすい土地であると評される町であった。それは港町であるという特性もあるだろう。また大阪と京都が近くにあることも関係しているだろう。大阪は経済活動の中心であり、京都は伝統文化の中心である。大阪や京都と比べると、神戸は周辺であるという気安さがあり、

それが外国人を受け入れやすい土壌になっていたのだろう。

その意味で神戸および阪神間は、外国文化だけでなく多様なサブカルチャーを含んだ重層的なコミュニティだった。多様なサブカルチャーはけっして摩擦なく存在していたわけではないが、さまざまな外国人が住み、下町もあれば高級住宅街もあり、古い家並みとハイカラな街が入れ子になっていた。それぞれが重なり合うように存在していた。このような神戸・阪神間のコミュニティの良さが、震災で失われてほしくないと思う。

マイノリティの問題は、外国人の問題にとどまらない。身体・精神障害者や被差別部落に対する差別問題などは、震災前からあったことである。神戸では現在、復興計画が展開されている。コミュニティに大きな変動が起きるとき、多数派の論理が跋扈し、マイノリティが、排除か同化か、の二者択一を迫られやすい。排除か同化かではなく、マイノリティがそのアイデンティティを保ちながら、地域のコミュニティに属する方向を模索することが大切なのである。

私たちはコミュニティの問題について、改めて問い直してみるべきだろう
(2)。人間らしい暮らしとは家の広さやモノの豊かさだけではない。どのようなコミュニティを作るのかということもひじょうに重要な問題である。

【設問1】（配点：20点）

下線(1)にある、阪神・淡路大震災のような大規模災害に遭った当事者と第三者の溝を埋めうるボランティアの存在について、筆者は、どういったものであったと捉えているのか。250字以上300字以内で説明しなさい。

【設問2】（配点：20点）

筆者は、下線(2)において、私たちのコミュニティの問題について改めて問い直すべきであるとの問題提起をしているが、このような問題提起に対して、あなた自身はどのようなコミュニティを作るべきであると考えているのか。自分なりの考えを、本文中に示された「ハネムーン現象」、「サブカルチャー」、「マイノリティ」という用語を用いて250字以上300字以内で説明しなさい。

以上